

山梨県における月待信仰について

—二十三夜和讃（二）—

坂 本 美 夫

- 一 はじめに
- 二 和讃の概要

- 三 和讃の検討
- 四 おわりに

一 はじめに

月待信仰は、「特定の月齢の夜に人々が寄り合い飲食などをともにしながら月の出をまつ行事」で、その目的が農業生産に根ざした一種の現世利益を求めたものである。⁽¹⁾ このような月待信仰の山梨県における状況について、

かつて石造物、文献、二十三夜堂を中心とした分布状況等について検討を加えてきた。近世月待塔四二七基の分布からは、北巨摩郡下とその周辺の中巨摩郡地域、それに上野原町、大月市、都留市とその周辺地域に実に九〇パーセントの分布状況がとらえられ、二大分布圏の存在が浮き彫りとされ、これら以外の地域は、局地的に集中する傾向をとらえられる地域もみられるが、相対的には希薄ないし皆無の状況にあることも合わせて確認された。しかし、⁽²⁾ 文献、二十三夜堂などからは、石造物の分布の確認できな地域においても、寺院の祭礼として月待行事が行われていたり、月待行事を行った二十三夜堂の存在、あるいは月待信仰の本尊である勢至菩薩が寺院の本尊となっていることなどから、そこに月待信仰の行われていたことを推定することができる。⁽³⁾ このことから、その濃淡は別として、さらに県内の広い地域において月待信仰の行われていた様子を明らかにすることができた。

月待信仰の具体的行事形態についても、山梨市（旧二富村）徳和地区で

行われていたおさんや講（二十三夜講）の行事形態を断片的であるが確認することができ、勤行時に唱えられた念佛、講で使われた諸具など、一部であるが確認することができた。⁽⁴⁾

今回、かつて月待信仰の中心的存在の勤行で唱えられたであろう和讃を確認することができた。断片的であつた行事形態の復元に、きわめて貴重な資料となろう。ここに、その記録と若干の検討を加え、月待信仰行事の一端を明らかにしたい。

二 二十三夜和讃の概要

（一）本の体裁

確認できた和讃は、都留市都留ミュウジアム図書室の蔵書中にあつた。この和讃は、『なむあみだぶつ』と題した和綴じの私本（渡辺茂氏蔵）をコピーしたものである。本の表紙の材質は不明であるが、格子状の陰影がみられる。滲みもみられ、また、長年に渡り使用されていたためか、表紙はもちろん本文ともども角が手ずれして、丸く擦り減った状況を窺える。

本の体裁は、縦二六、三センチメートル、幅二一センチメートル程のもので、現在のB5版の大きさにほぼ該当する。本文は、單紙に墨で仮名書きされ、二つ折りして綴じられている。本の題名も、手書きされたもので、

裏表紙には「昭和四年」なる印影と所有者名、それに「都留郡盛里村」なる住所が書かれている。特に住所の書かれていることは、月待信仰の行われていた地域を特定するうえで重要な点といえよう。

この本は、総頁数七〇頁に渡るもので、念佛講の和讃集といえるものである。この中の一つとして、二十三夜和讃が納められている。同様な形態は大月市賑岡地区で唱えられている二十三夜和讃も、念佛講の中で唱えられているもので、これからすれば、念佛講と月待講とが習合した念佛講の中で唱えられた二十三夜和讃といえる。和讃を唱える講に念佛講などがある。そのうち阿弥陀仏を唱える称名念佛では、「日待、月待と習合し、十九夜・二十三夜に行われる地区がある。この後者の例では念佛講が女人講と習合し、安産祈願・血不淨の清めを願つて念佛を唱えている」と言われてもいる。^(五) 県内でもこの他に、南アルプス市（旧八田村）下高砂神明社境内所在の二十三夜塔に、習合例がみられる。この月待塔には、「二十三夜供養」銘のほかに「帰命頂礼大日如来」なる銘が合わせて彫られている。大日如来が日待ちの本尊であることを考えると、日待信仰と月待信仰とが習合した例といえよう。本例も、盛里村地内で行われていた念佛講と月待講とが、いずれかの時点で習合したものといえる。このことから、都留地域でかつて行われた月待講の勤行で唱えられていた和讃といえるであろう。

この和讃は、七五調を基本とし、一六句からなる。形態としては、「俗の和讃」の部類に入るものとおもわれ、^(六) 月待信仰のために作られたものといえる。その内容から作られた時代まで特定することはできないが、郡内地域で月待信仰の盛んとなつた江戸時代以降に作られたものであろう。身近なものを題材として作られた和讃といえる。

(二) 和讃の内容

二十三夜 和讃

あみだぶあみだぶ
あみだぶつ

阿弥陀仏 阿弥陀仏

なむあみだぶつ
南無阿弥陀仏
阿弥陀仏

あみだぶつ

きみょう ちょうどい

てんじくの

二十三やの つきさまを

つきつきまちる

その人に

ふくとくあたえる

ごせいがん

かいこもあたれば

さくもよし

ふうふは二ふうふ

そろいます

みふうふそろふた

そのいへに

くらをたてます

七とまへ

一ばんをくらが

かねぐらで

一ばんをくらが

きぬぐらで

一ばんをくらが

いとぐらで

四ばんをくらが

まいぐらで

五ばんをくらが

帰命頂來

天竺の

二十三夜の月様を

月々満ちる

その人に

福徳与える

ご請願

蚕も当たれば

作くも良し

夫婦は三夫婦

揃います

三夫婦揃うた

その家に

蔵を建てます

七戸(棟か)まへ

一番お蔵が

金蔵で

二番お蔵が

絹蔵で

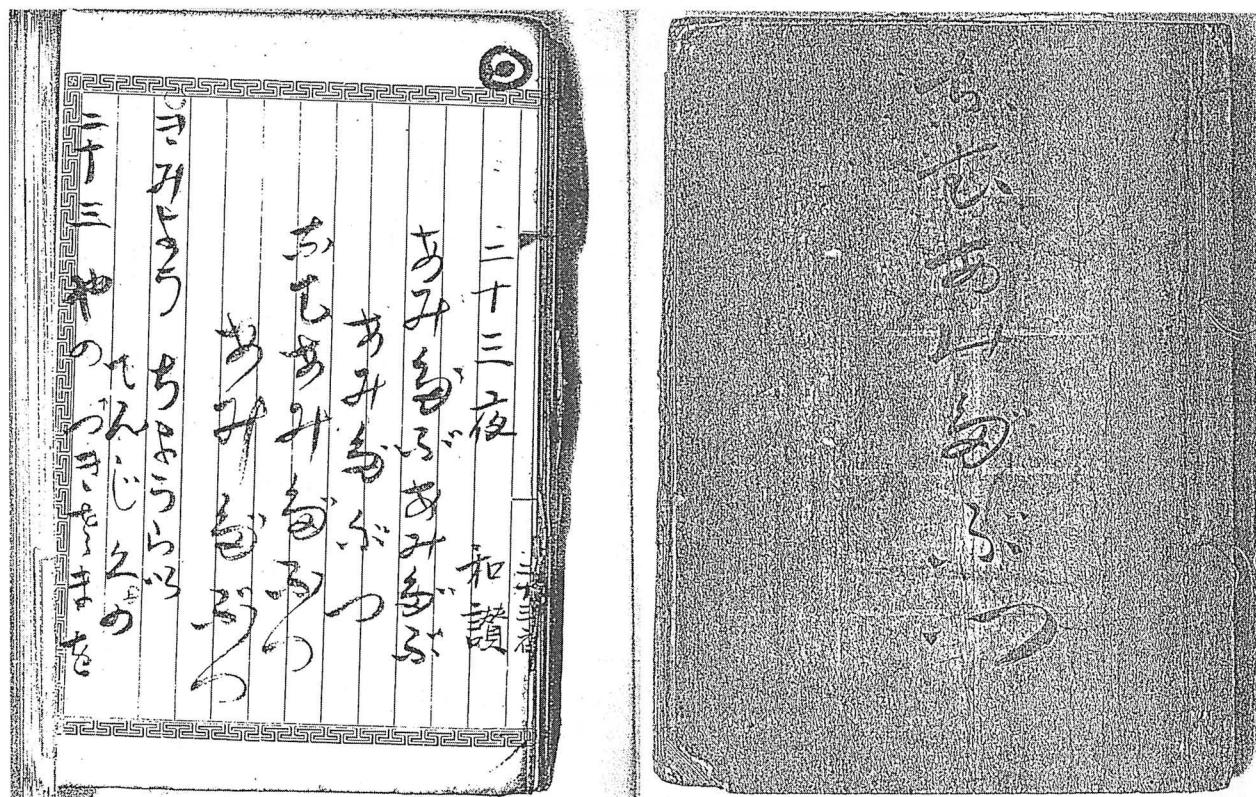
三番お蔵が

糸蔵で

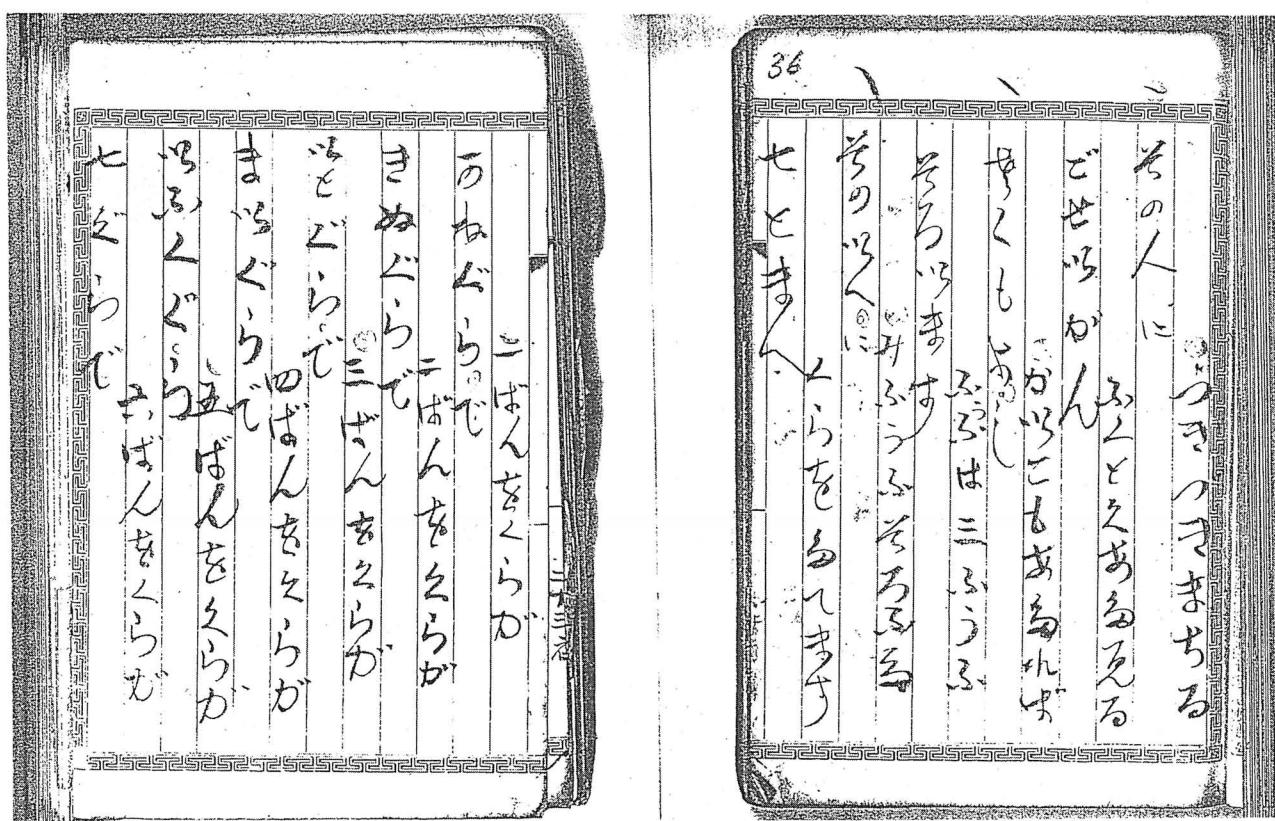
四番お蔵が

蘭蔵で

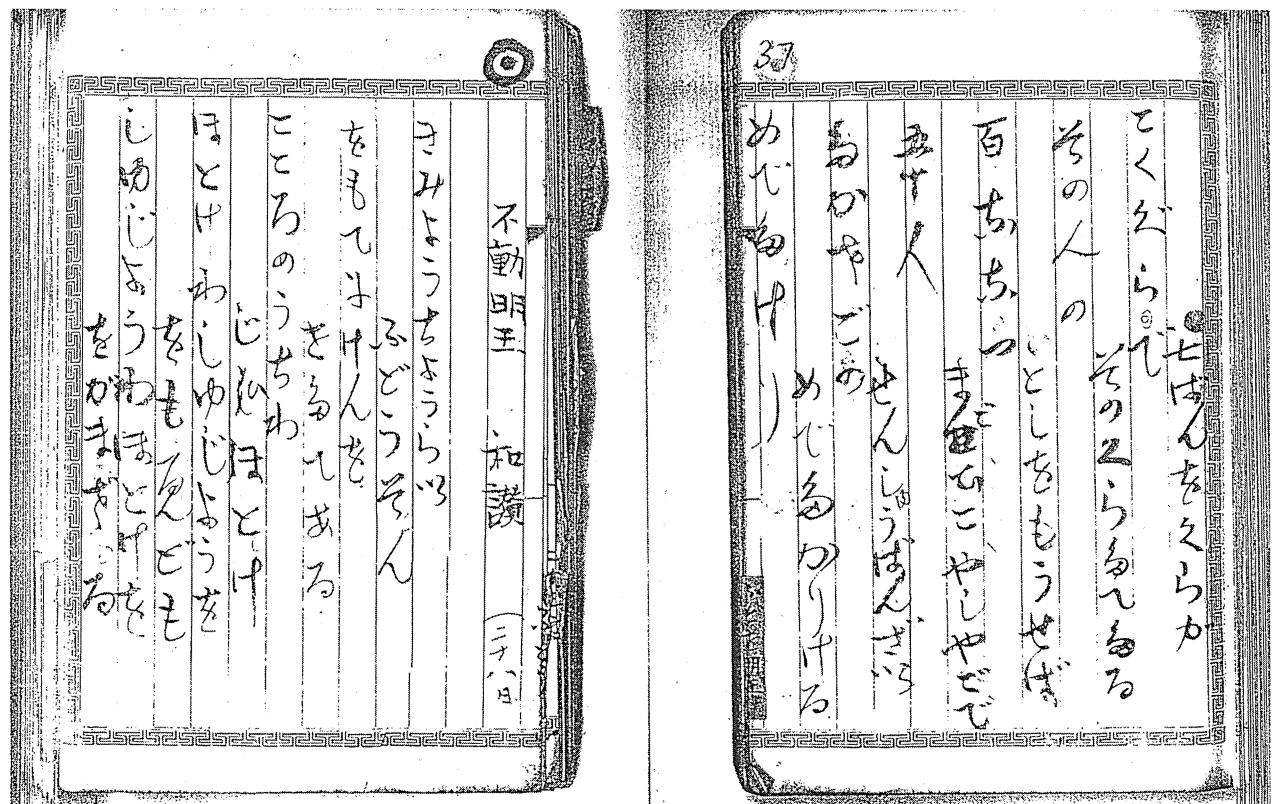
五番お蔵が



(表紙)



第1図 二十三夜和讃 (1)



第2図 二十三夜和讃 (2)

いふくぐら

六ばんをくらが

七ぐらで

七ばんをくらが

衣服蔵
六番お蔵が
質蔵で

こくへらで

そのくらたてたる

その人の

としをもうせば

百ななつ

まご、ひこ、やしやこで

五十人

孫、曾孫、玄孫で

百七つ

せんしゅうばんざい

たかさごの

千秋万歳

めでたかりける

高砂の

めでたけり

めでたけり

以上、上段が『なむあみだぶつ』に記された「二十三夜和讃」で、下段

がそれを現代語に直したものである。

めでたけり
めでたかりける
めでたけり

三 和讃の検討

(一) 和讃の内容

次ぎに、和讃の内容について検討を加えてみたい。

文頭にみられる阿弥陀ぶ(仏)から阿弥陀仏まで、仏・菩薩などに一身をかけて頼みごとをする意で、これは念佛で唱えられる文句である。その後に、月待信仰の本尊への一身の呼びかけ、請願を行う文句となる帰命頂しめじとうわほことげのふをかまきりある

これ以後は、請願により望みがかなえられるように、いろいろな福徳について、物語的に述べている。まず養蚕の出きがよく収益があがり、作す

なはち米などの作物の作柄もよく、豊作であり、しかも、三夫婦といった三代が健康なうちに一緒に生活をおくることへの感謝を表している。そしてこのような幸福の中で、裕福の象徴である七つの蔵を建てることを述べている。一番蔵が金（可ね）蔵、二番蔵が糸蔵（木綿の反物あるいはその反物を織る絹糸）、三番蔵が糸蔵（木綿の反物あるいはその反物を織る木綿糸）、四番蔵が繭蔵（「まい」は繭の方言。「めえかき」などの作業の言い方がある）、五番蔵が衣服蔵、六番蔵が質蔵（貸し付けの際の質草を納めた蔵）、七番蔵が穀蔵（米、麦、雑穀）である。

さらに蔵を建てた人物が、三夫婦揃つたということで、現在でも稀な百七歳といった長寿を与えられ、さらに沢山の孫などを得て、反映の久しく続くことを祝い、喜び、目出度いことと讃え、終わりとなる。

このように、その目的が農業生産に根ざした一種の現世利益を求める、講を結んで請願したことが確認できる。

（二）現世利益

現世利益として請願したのは、健康、子孫繁栄、財物（蔵）である。このうちの蔵について、現在県内に残る民家の屋敷構えなどと比較してみた。ここで取り上げる民家は一七世紀前半から明治時代前期までの二〇例で、これらの家には付属建物として色々な蔵がみられる。屋敷内に配置された蔵のうち、特に多いのが文書蔵の八割方、次ぎに穀（米・糀）蔵の五割方、味噌（味噌部屋）蔵の五割方であった。例数が少ないものに座敷蔵、質蔵（七・ヒチ）、納屋蔵などがみられる。納屋蔵は、以外と少なく、これらの中では一例だけである。しかし、これらの屋敷には納屋部屋などの表記がみられるところから、これらが納屋蔵に代わるものといえよう。そして納屋蔵は、色々な生産物、物品などを収納した蔵と考えられるものといえる。

次ぎにこれらと今回確認された和讚とを比較すると、一致するものは穀蔵、質蔵といった僅かなものに過ぎない。しかし、納屋蔵については、前述

民家名	住所	付属建物						年代
		文庫蔵	穀蔵	質蔵	味噌蔵	座敷蔵	納屋蔵	
上野正氏住宅	山梨市東	文庫蔵	穀蔵	質蔵				17世紀前半
萩原貞夫氏住宅	春日居町鎮目	文庫蔵	穀蔵		味噌蔵	座敷蔵		19世紀中期
竹井義明氏住宅	塩山市三日市場	文庫蔵	穀蔵					17世紀後半
風間朔太郎氏住宅	塩山市千野	文庫蔵						19世紀前半
八田政統氏住宅	石和町八田	文庫			味噌蔵			17世紀後半
大須賀和夫氏住宅	境川村石橋		米蔵	ヒチ蔵				18世紀末期
塙田一作氏住宅	豊富村高部				味噌蔵			17世紀末期
神田泰正氏住宅	増穂町春米	文庫蔵						19世紀前半
安藤勢ん氏住宅	甲西町西南湖	文庫倉						18世紀前半
藤巻 悅氏住宅	甲西町鮎沢	文庫蔵						17世紀後半
穂坂鶴義氏住宅	櫛形町高尾				味噌蔵			明治前期
矢崎徹之輔氏住宅	白根町有野	文庫蔵						17世紀前期
内田正明氏住宅	玉穂村極楽寺	文庫蔵	穀蔵		味噌部屋			19世紀中期
中島克巳氏住宅	八田村野牛島		穀倉		味噌蔵		納屋蔵	19世紀前期
中島信次氏住宅	双葉町宇ノ谷	文庫蔵				座敷蔵		18世紀中期
名取倭男氏住宅	韮崎市穂坂町		穀蔵		味噌蔵	座敷蔵		19世紀中期
八代英蔵氏住宅	明野村上手	文庫蔵						19世紀初期
風間巖氏住宅	武川村牧原		穀蔵		味噌蔵			19世紀前半
小佐野倍彦氏住宅	富士吉田市上吉田				(味噌蔵)			18世紀末期
星野竜氏住宅	大月市大月	文庫蔵	糀蔵		味噌蔵			19世紀前半

第1表 県内民家の付属建物

のようにいろいろな物を収納したものと考えられることから、和讃ではこの中に納められたものを一つずつ具体的に絹蔵、糸蔵、繭蔵、衣服蔵などとしたものと考えられる。従つて、請願の対象となつたものが、生活の中に根差したもので、かつ周辺にみられる裕福のシンボル的物資であつたことを確認できる。

(三) 和讃中にみられる印しについて

和讃中に、いくつか記号のようなものがみられる。まず、「つきつきまる」の文頭に「●」の印が付けられ、さらに同様な印が下段の文頭に一行おきに、規則的に付けらるれてい。次ぎに「てんじく」と「の」の間に「上」、「さくもよ」と「し」の間に「○」、「そのいへ」と「に」、「あねぐら」と「で」、「こくぐら」と「で」、「百なな」と「つ」それに「たかさご」と「の」の間にそれぞれ「◎」、「いとぐら」と「で」、「いふくぐ」と「ら」との間に「・」の印が付けられている。これらの印には、どこを唱えているのか分かれるよう、例えば「●」印はその規則性などから付けられた印のように思われる。また、これと違う印については、和讃を唱える場合の調子、抑揚などの場所を分かれるよう、その印として付けられたものではないかと考えられる。

六 おわりに

都留市域にある旧「都留郡盛里村」で行われていた月待信仰の和讃について取りあげてきた。現在は行われていないが、月待信仰で行われた勤行の復元には欠かせない資料となる。和讃については、現在でも大月市脇岡町地区で、二十三夜の和讃が唱えられていることが確認できている。今後、本和讃との比較を行い、内容、地域性の有無などを検討してみたい。

最後に、調査に際して渡辺茂、岩村善吉、杉本悠樹、堀内享の各氏にご援助、ご教示を賜つた。厚くお礼申しあげたい。

註

一 桜井徳太郎 「月待」『日本歴史大辞典』 昭和三七年。

二 その後、四八基の月待塔が新たに確認され、県内での総数が四二七基となつた。特に旧須玉町、旧明野村での追加数が増えた。また、盆地東部の山梨市においても多くの追加の確認があり、盆地東部も盆地西

部・都留郡地域ほどではないが、月待塔の集中がみられる地域といえるようである。

三 拙稿

一九九三「山梨県における月待信仰について—特に石造物の展開を中心として—」『研究紀要』十周年記念論文集 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

拙稿 一九九九「山梨県における月待信仰について—文献を中心として—」『研究紀要』一五 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

拙稿 一〇〇〇「山梨県における月待信仰について—塩山市小屋敷の二十三夜堂を中心として—」『研究紀要』一六 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

五 註一に同じ

六 多屋頼俊 一九三三『和讃史概説』 法藏館

七 山梨県教育委員会 一〇〇〇『山梨県の民家』

山梨県史編纂委員会 一〇〇〇『山梨県史』 文化財 山梨県

八 会

所 在 地	種 類	形 式	年 代	銘 文
旧白根町 在家塚 北向地藏	(勢至菩薩)	箱形	一七六三	□曆十三癸未 待大勢至菩薩等 一月廿三日 講中
旧大和村 永野田 祖師堂横 上岩下八四 番地先	七夜塔	自然石型		二十三夜塔 二十三夜塔
山梨市	角柱型			
下神内川	自然石型	一八〇二		
西 一一三七番地	舟型	七夜待供養		二十三夜
市川 金比羅神社	自然石型	(3)十一月日	當村	廿甘三夜 廿文政九戌十一月 道悅
北 一八四番地	自然石型	(3)十一月日	道閑	一八二六
一丁田中 不動尊	自然石型	(3)十一月日	道闇	一八五二
二十三夜塔	自然石型	(3)十一月日	道闇	一八六八
自然石碑 面型	自然石型	(3)十一月日	道闇	廿三夜
二十三夜塔	自然石型	(3)十一月日	道闇	廿三夜
歌田 二三八番地	万力 諏訪神社	廿三夜 (背)	當村	廿三夜
二十三夜塔		一番に神風の 草丸	道闇	廿三夜
		中澤	道闇	廿三夜
二十三夜		(3)明治四十五年一月二十三日	道闇	廿三夜
		磯野李太郎 磯野傳太郎 飯島勝太郎 飯島良藏 向山庸造 田草川房太郎	道闇	廿三夜
		吹く野梅可那 鳴呼遠く流礼南笠 来に今季春能水	道闇	廿三夜

所在地	種類	形式	年代	銘文
旧勝沼町 (辻方前) 菱山	二十三夜塔	自然石型	廿三夜	神職武井京象謹書
旧中道町 心経寺	二十三夜塔	自然石型	天保四年 二十三夜塔講	
旧上野原町 西原田和 バス停	二十三夜塔	自然石型	寛延三年 供養念三夜講中 十一月日中	
旧秋山村 二十六夜山 大月市 梁川町 中野畠隅	二十六夜塔	自然石	午九月吉日	
扇山山道	二十三夜塔	箱型	二十六夜 明治廿二年丙九月日	
	一八七六	一八八九	廿三夜塔 (3)七月九日	

※本表の追加資料は、踏査のほか、次の文献から取り上げた。

明野村
一九九五
『新装 明野村誌』石造物編
山梨市
二〇〇一
『山梨市の石造物』
須玉町
二〇〇一
『須玉町史』社寺・石造編